

# 柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話：070-1503-6401/044-988-0004

<http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo>

第 172 号

かわさきの  
郷土史を読む 12

小島一也著『麻生郷土歴史年表』・『麻生の歴史を探る』(その3)

川崎市教育委員会事務局文化財課学芸員 新井 悟

## 小島一也著『麻生の歴史を探る』の内容紹介(2)

今回は、中世にかんして「第三十七話 法雲寺と笹子姫」、近世にかんして「第九十四話 露天商場屋一家」を取り上げます。

### 「第三十七話 法雲寺と笹子姫」

麻生区の高石に法雲寺という古刹があります。新編武蔵風土記稿によると、江戸時代初期の創建となっていますが、川崎市重要歴史記念物に指定されている平安時代の阿弥陀如来坐像が伝わっています。この仏像には定朝様の特徴があり、市内にのこる平安仏のなかでも最もよく都の香りが感じられるものです。この如来像にかかわる話。

治承元(1177)年鹿ヶ谷の密議が露見したことがこの発端です。平家を打倒するための計画が暴かれ、清盛によって首謀者が罰せられ、後白河法皇も幽閉されてしまいます。身の危険を感じた法皇の第二皇女笹子姫は従者 4 人とともに古沢の地に落ち延び、隠棲しました。この時、法皇から授かったのがこの阿弥陀如来像であると寺の言い伝えにあるそうです。また笹子姫にしたがった従者は、地元で定住し、いまにつづく旧家となっているそうです。笹子姫の名は正史に伝わっていないのですが、平安仏をめぐる麻生の地と都とのエピソードです。また法雲寺の創建年代とこの阿弥陀如来像との関係は今後の課題といえるでしょう。

### 「第九十四話 露天商場屋一家」

麻生不動のだるま市は明治から大正にかけて始まり、毎年 1 月 28 日に開催されて、おおくの露天商で賑わいます。これを差配していたのが、縁日商の揚屋一家です。この帳元の家は、屋号が“揚屋”とよばれ、享保のころ(1716~25)幕府にだした商人掟書が残されているそうです。またこの家に伝わる文書によると、享保のころ王禅寺村で縁日商を営んでいたのは 13 名だったとわかります。

ここには俠気のある話が伝わっているのですが、詳しくは実際の本をご覧くださいと思います。また小島氏のまえにご紹介した伊藤葦天も、文学者の達意の筆で、この一家のことを書いています。

『麻生の歴史を探る』は、小島氏が亡くなられた後に出版されたものですので、「あとがき」は奥様の小島八重子さんが書かれています。その文章の最後の段落は、つぎのようにしめくられています。「この本をきっかけに興味をもって下さる方が増え、ロマンを秘めた麻生の地に思いを馳せ、謎の解明…さらに精査考察して頂き、ふるさとの歴史が次世代に語り継がれます事を願っております。」と。ご主人のお仕事への思いとその継承の願いが伝わってきます。と同時に、「麻生の地」を「郷土」におきかえて読むと、これまでご紹介した郷土史の先人のすべての仕事にあてはまる気がします。(完)

× ×

本シリーズは、川崎市域にかんする郷土史研究をすすめられた先人の中から、山田蔵太郎氏、小塚光治氏、伊藤葦天氏、小島一也氏の 4 人を選び、著書を紹介してきました。たくさんの郷土史研究者のなかからこの 4 人を選んだ理由は、すでに亡くなられた方であつた広範囲の郷土史を扱われた方というものでしたが、このほかにも多くの郷土史家が活躍されています。川崎市内の図書館には「郷土史資料」のコーナーがあります。ぜひご覧になっていただけたらと思います。

本シリーズを終えるにあたり、参考までに 4 人の主著をあげておきます。

山田蔵太郎(1868~1931)：1927『川崎誌考』石井文庫(1982年に国書刊行会から復刻)、

1930『稲毛川崎二ヶ領用水事績』(稲毛川崎二ヶ領普通水利組合)

小塚光治(1911~2002)：1961~6『川崎史話』全 3 巻(多摩史談会)、『川崎史話』(桐光学園教育研究所)

伊藤葦天(1883~1974)：1958『川崎新風物詩』(かわさき新報社)、1963『川崎風土記』(川崎新聞社)

小島一也(1927~2014)：1986『ふるさとのルーツを訪ねて』(華沙里)、1995『柿の実百話』(柿の実幼稚園)、

2009『麻生郷土史年表』(自費出版)、2016『麻生の歴史を探る』(自費出版)

大地に刻まれた  
歴史探勝 9

# 早野横穴墓の線刻画と、馬の調教を連想させる地名など

村田 文夫(日本考古学協会会員)

被葬者が眠る高塚古墳や横穴墓の壁面には、時折、被葬者の生前の事績を偲ぼせる壁画が発見されます。悪戯画もありますが、真剣に検討すると、意外な歴史がみえてきます。

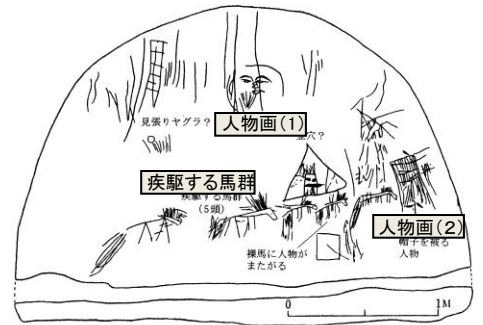
## 麻生区早野の横穴墓から線刻画が発見されたぞ!!

昭和 47 年(1972)5 月、鶴見川の支流に位置する早野から発見された横穴墓に【線刻画】があるという情報が教育委員会にもたらされました。地元の人がムジナを追いかけていた折に発見されたという。私も小池汪カメラマンと小さな穴から入り、懐中電灯で壁面を照らすと、先端の尖った鉄製工具で線刻された壁画が見えてきました。そりゃ、感動しましたよ。ただこの種の線刻画は、後世の悪戯画もありますので、複数の専門家に真贋の鑑定を依頼しました。

早野横穴墓(7 世紀中頃)の線刻画題のハイライトは、奥壁の中央部に描かれた顔面のみの人物画(1)と、下方に描かれた、立て髪と尻尾が風になびく馬 5 頭などでした(第 1 図)。この馬群が走る先頭にも被り物をした人物画(2)が描かれています。これ以外にも線刻画は認められますが、ここでは字数が限られているので、人物画と馬群に焦点を絞ります。

専門家として久保常晴先生をご案内したとき、この辺りは平安時代の『延喜式』に記載された「石川牧」に近いことから、草原を疾駆する馬群との関連性を口にされました。ただ横穴墓の築造時期と『延喜式』との年代差は、大きな課題でした。樋口清之先生は、見るなり人物・馬群画などの描写を含め、線刻画には信憑性があると看破。これで心底、ひと安心しました。

お二人の先生の話から、わたしは疾駆する馬群の 5 頭は「調教中の牧場の風景」で、馬群先頭の人物画(2)は、馬群の調教者、または調教場の管理者を想定しました。問題は、奥壁中央に描かれた人物画(1)。面相はシャープで、モデルは、当初は被葬者を想定しました。が、ただ顔面のみの描写で頸部以下を欠如しています。そこで、いまでは被葬者の周りに群がる悪鬼・妖魔を睨みつけ、追い払ういわゆるガードマン役を想定しております(写真 1)。



第 1 図 早野横穴墓奥壁線刻画

では、これらの馬を調教する「牧」はどこにあったのでしょうか。その有力候補が、早野横穴墓から鶴見川を約 3 km 遡った東京都町田市の鶴川遺跡群。わたしは『武蔵国橘樹官衙遺跡群の古代学』(かわさき市民アカデミー双書)ほかでこれまで再三紹介してきました。ここでは要点だけを書くと、自然地形である深く細長い谷戸部に多数の調教馬を開放する方法です。「馬込」・「駒込」・「籠馬谷」などの地名がその場所を示しています。野馬であっても 35 度以上の急斜面は駆け上れないという習性があるからです。線刻壁画が発見された早野も、古い地図で見ると鋭く深い谷戸が幾条か確認できます。もう少し、馬の話の続けましょう。



写真 1 早野横穴墓奥壁人物画

## 調教馬は、死しても有効? 利用された

調教された馬は選ばれて都城で使役されるエリートのほか、多くは郡衙(郡の役所)などで、公的な役務につきました。特に武蔵国は宝亀 2 年(771)以降、東海道(現・中原街道沿い)に小高駅家が置かれ、そこには駅馬 10 匹と伝馬 5 匹が常備され、馬は常に使役されていました。「駒込」・「籠馬谷」など話題はふれましたが、関連してもう一つ重要な地名を紹介します。中原区の「等々力」は、「とどろき」。ところが、「とどろき」の読みに通じる漢字はない。以下は古代史・平川南先生の見解。「等々」はトドロキと読みますが、これは「轟」(とどろく)・「轟」(左に同じ)に通じて、馬蹄の音で騒がしい状況のこと。いまの「等々力」は、古代・東海道の道筋ですから、おそらく古代から馬蹄の音も絶えなかったのでしょう。

さらに死した官馬は、皮のほか脳漿(のうしょう)を搾りだし、皮鞣(かわなめし)などに利用されました。実際に脳漿が搾り出された馬も発掘されています。このような技法は、北方ツングースの民族にはじまり、わが国には韓半島から伝来したものと考えられています。

訂正 1. 第 170 号 2 ページ目本文 3 行目: (正)白山古墳の隣塚ではなかった ← (誤)陸揚ではなかった  
2. 第 171 号 2 ページ目の表題: (正)古墳時代の横穴墓に布島を掛ける ← (誤)布島を掛ける

シリーズ

教育の歩み 第3部

## 日本の学校と教育(28)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## 学級共同体と現代の教育

特に日本で顕著な生活共同体化した学級の存在は、児童・生徒にも教師にも大きな負担を強いるものでした。曰く「学校は学習するだけの場ではなく、学習やその他の教科外活動を通じて、社会生活のルールを学び、人間性に磨きをかける全人教育の場である。」などと……。学級が単に学習のためだけに集められた場であれば、学級規律のための自己抑制という代償を払った学習成果の獲得が、代償に見合ったものであるかどうかは分かりやすく、成果への期待も自覚されやすくなります。成果として学習の理解が進み、結果として成績が向上する。そうならなければおかしいと、当事者間で了解されることになり、授業態度も真剣になります。

現代でいうなら、学習塾が見事にこの例に当てはまります。ところが生活共同体と化した学校・学級においては、こうした自覚は生まれにくくなります。学級においては、学習成果の獲得に関係なく、自己抑制の継続が求められます。そこでは、自己抑制が目的と化し、児童・生徒はひたすら真面目であることを要求されるのです。これは本末転倒なのですが、真面目であることが、教育の成果であるかのような主張も、時に見受けられます。

本来の地域共同体が失われた高度経済成長期以降の日本では、教師がしきりに学級共同体を説き、クラスの団結を強調しても、集団生活に違和感を持つ生徒たちにとって、それは苦痛以外の何物でもなく、耐え難いものとして意識されるようになります。教師が積極的に学習目的に児童・生徒を誘導し、具体的成果が眼に見えてあがっている場合を除けば、こうした生徒たちが、自ら充足感を得るための勝手な行動に走ることは、当然起こりえます。そうした行動は多くの場合、衝動的であり、多方面に分化して現れます。そうした行動の一部分は、学校が容認し得るものであっても、多くはとても容認し得るものではなく、強く禁じようとする行動となって表面化するのはこのためです。いじめ、不登校、非行など、どれもが解決の難しい問題ですが、学校・学級の要求する自己抑制に基づく規律に対する、児童・生徒らの反発行動の、具体的な表現でもあるのです。

塾と学校の根本的な違いは、学校が需要に基づいて発達したものではなく、義務教育という強制によって発達した供給先行型組織だという点にあります。義務教育もまた資本主義社会の産物であることは、否定しえない事実ですが、資本主義が本来需要に基づく供給によって成り立つ、需要先行型システムであることからすると、学校だけが異質の存在なのです。既に記してきたのですが、明治30年頃までは、学校への需要は高まりませんでした。学校は学習の場ですから、学校と教師の最大の仕事は、学習を通じて児童の学力の向上を目指すことにあります。学校が供給先行ではなく、需要先行で誕生したのであれば、教師は迷うことなく、学習活動を通じて学力の向上をはかる仕事に専念したはずですが、しかし、そうはならなかったために、教師は児童を学校組織に取り込むための仕事にも、取り組まざるを得なかったのです。

確かにこういう状況にあっても、教師の努力の結晶として高い学力を獲得した児童も相当数に達しました。しかし、一方では、学級組織に馴染めず逃亡しがちになる児童を学校と学級に引き留めるための活動にも、時間を割いて取り組まざるを得なかったのです。この状況で、多忙な教師が編み出した効果的な学習意欲の掻き立て方が、児童間の成績競争を煽ることでした。学習とは、学ぶことで身に着けた知識を生かして、身の回りのことに始まり、地域社会から国家へ、さらには世界から宇宙へと思考の枠を広げることによって、本来総合的なものである人間観、社会観、そして世界観といった本質的な価値観を身に着けてゆく営みです。それゆえ試験の成績が少々良いとか悪いとかで、評価すべきものではありません。学級や学校での序列が上がったとか下がったとかで、一喜一憂する気持ちも分らなくもないのですが、本人の持つ本質的な学力とは直接的に繋がるものではないのです。

立身出世主義の影響が強く残り、受験学力が幅を利かせた日本では、試験ごとの序列が重視されました。それは、教師にとって、生徒たちの学習意欲を刺激するには大変好都合なことでした。しかし試験のための勉強は、一時的な詰込みに過ぎません。脳内に深く刻み込まれることなく、しばらくのちにはきれいに忘れ去られてしまうのですから、学びの本質には繋がらないものなのです。学ぶことで何が見えてくるかと、知的好奇心を刺激することで、学習意欲を掻き立ててこそ、学んだことはごく自然に脳内に定着するのです。好きなことを覚えるのは苦痛ではない。皆さんもそんな体験をお持ちではないでしょうか。理科教育で良く語られるのですが、先生が教壇で一人で実験して見せる「デモ実験」の記憶定着率は、生徒全員によるグループ実験に比べ、定着率が大きく劣るのだそうです。

(続く)

柿生・岡上の  
地域文化財

五力田 金神神社の福寿大黒天

金神神社宮司 吉崎 修

五力田の金神神社には、令和二年に川崎市の地域文化財(有形文化財)に指定された福寿大黒天と讃える、大国主命がその側宮に祀られております。この大黒天は、三俵の大黒天とも呼ばれ、三俵俵上七尺七寸、檜巨木の一木一刀彫りで、国内唯一のお姿であります。江戸時代中期に飛騨の彫刻師玉山が最後の作として、三年に渡りこれを彫刻し、大黒天の完成を見届け、安堵して他界したとされます。その日が7月17日であったことから、大黒天の祭典は毎年7月17日に行われるようになったと、伝わります。



大黒天立像



お顔

その後代々甲州の中村家に奉られていましたが、大正末期に、牛車にて六日間かけて移送され、当神社にご遷座に至ります。

神官山田裕道は大国主命の御神霊を入魂し、以来事業繁栄と、家内安全の御守護神として、多くの人々に崇め奉られて現在に至ります。その御神顔は何一つ曇りなく、慈悲と福德に満ち溢れた笑顔は、奉斎する人々に、自信と精神の安らぎを与え、幸福と開運を授け給う事、数知れず、その御威徳の深さと偉大さに、奉斎する信徒が全国に数多くいらっしゃいます。



今年の祭典の様子

大黒天のお祈りは、今までは、ほぼ関係者のみで執り行っていました。今年も初めての方が3名参加され、玉串を捧げて頂きました。ありがたいことです。このお大黒様の笑顔で、心を癒される人が少しでも増えることを願っております。



\*

当神社は山岳信仰からおこった神社で御座います。開祖であります山田勘蔵(明治二十六年生まれ、後に裕道と名乗る)は幼少より病弱でありましたが、十七歳になった時、修験者として山奥深く分け入りました。山野の草、木の実を食料として、窟籠り、山林トソウ、不眠不動、水行など十七年の苦行を経て、ついに“靈験”を得るに至りました。奥山で修行中の開祖の身なりや、一瞬で物事の真実を見透かす眼光の鋭さ、素早い身のこなしは、さながら“天狗”そのものであったと伝わります。

その後、里に下りて開いたのが、当神社の起源で御座います。当時は大戦から関東大震災へと続き混乱期であった為、開祖の噂を聞きつけた庶民が、救済をもとめて並び「長い行列が絶えなかった」と記録に残っております。また、大正十五年には宗教法人として認可されました。現在でも身体安全や、病氣平癒のご祈祷、車のお蔽い等、命に係るご祈願では山岳信仰の色濃い祭典となります。

その後、里に下りて開いたのが、当神社の起源で御座います。当時は大戦から関東大震災へと続き混乱期

祭神は天地固埋大神 金山二神、天福三神、天照皇大神を奉斎いたします。

祭典は、元旦祭、節分祭、七寿祭(大黒様の祭り)、秋季大祭、大祓い祭が執り行われていますが、2月3日の節分祭には、近隣の老若男女や保育園児が訪れて、豆撒き神事が行われ、普段は静寂な神社が、この日ばかりは明るい声に包まれます。

柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】

◎開館日:9月11・18・25日(毎日曜日) 10月1・8・15・29日(毎土曜日)  
◎開館時間:午前10時~午後3時(緊急事態宣言等発令の場合は休館となります。セミナーも再々延期です。)

ボランティア募集のお知らせ 主な内容:①「柿生文化」編集 ②ホームページ管理(要パソコン操作)  
ご参加検討いただける方は当館ホームページの「お問い合わせ」から連絡をお願いいたします。